公益財団法人 京都新聞社会福祉事業団

活動パンフレット

▲詳しくはこちら

２０２６年１１月



京都新聞社会福祉事業団の活動

京都新聞社会福祉事業団は、1965年（昭和40年）、京都府・滋賀県における地域福祉の発展に寄与することを目的として、京都新聞社が取り組んできた社会福祉事業を統合し、財団法人として発足しました。

皆さまからお寄せいただいた温かいご寄付は、当事業団の福祉活動を通じて、京都府・滋賀県の地域福祉を支える大きな力となっております。

さまざまな事情により学費の捻出が困難な生徒・学生を支援する「愛の奨学金事業」、障害のある方の自立や社会参加を応援する「障害のある人のための事業」、高齢者の生きがいづくりを支援する「高齢者のための事業」、子どもたちの健やかな成長と明るい未来を支える「子どもたちのための事業」、子育てに悩む母親を支援する「子育て応援事業」、福祉団体・施設などの活動を支援する「福祉活動支援事業」など、地域に根ざした幅広い福祉活動に大切に活用させていただいております。

皆さまのご厚意を心より感謝申し上げるとともに、今後も「ともに生きる」社会の実現を目指し、より一層、地域福祉の充実に努めてまいります。

1 奨学金 2〜3頁
2 障害者 4〜9頁
3 高齢者 10〜11頁
4 子ども 12〜13頁
5 子育て 14〜15頁
6 福祉活動支援 16〜17頁
7 顕彰 18〜19頁

1

奨学金





◆京都新聞愛の奨学金（贈呈式７月）……２～３頁

京都、滋賀に在住する高校生、大学生、専門学校生らを対象に、返済不要の奨学金を支給しています。本事業は、家庭の経済事情などにより学費の捻出が困難な生徒・学生を支援するために、当事業団の発足以来、６２年にわたり継続しているものです。

◉奨学金は、以下の4つの部門で支給しています。

❶一般の部（公募）　❷交通遺児の部（公募）

❸定時制・通信制高校生の部（公立高校から推薦）

❹児童養護施設の高校生への奨学激励金

◉支給額は、高校生一人あたり年額９万円、大学生・専門学校生には年額１８万円を支給。児童養護施設（京都・滋賀の１７施設）に在籍する高校生には奨学激励金として３万円を支給しています。

◉２０２６年度の支給実績

❶一般の部：１７２人（計2,３５８万円）　❷交通遺児の部：１０人（計１３５万円）

❸定時制・通信制高校生の部：１１人（計８１万円）

❹児童養護施設の高校生への奨学激励金：１４０人（計４２０万円）

合計３３１人に対し、総額2,９９４万円を支給しました。

児童養護施設の高校生への奨学激励金（２０２６年７月２７日付　京都新聞朝刊）

事業団だより

がんばる高校生に奨学激励金

児童養護施設の140人に420万円

京都府と滋賀県にある児童養護施設で暮らす高校生を対象にした京都新聞社会福祉事業団の「奨学激励金」贈呈式が18日、京都市中京区のハートピア京都で行われた。代表生徒が施設長らとともに出席し、同事業団の白石真古人常務理事から受け取った＝写真。

激励金は、市民や企業、団体などからの「児童養護施設・乳幼児等の子どもたちのための寄付」を原資に、１人３万円を贈っている。「愛の奨学金」他部門受給者と申請者のいない施設を除く140人に総額420万円が贈られた。

白石常務理事は、児童養護施設の子どもたちを応援する各種事業を支援している寄付者の皆さんについて紹介し、これら寄付金には「夢に向かってがんばる皆さんを応援したいという多くの方々の願いが込められています」と伝えた。



代表生徒と出席した施設長の１人は「寄付に込められた思いを、施設に帰ってからみんなに伝えて共有したい」と語った。

２０２６年度 京都新聞 愛の奨学金 贈呈式

（２０２６年７月２７日付 京都新聞朝刊）

ともに生きる

書・杭迫柏樹

◆「京都新聞愛の奨学金」贈呈式◆

支援を受けた人が支える側へ

巡る善意、社会に還元



代表生徒に奨学金を手渡す白石真古人常務理事

京都新聞社会福祉事業団の２０２６年度「京都新聞愛の奨学金」贈呈式が18日、京都市中京区のハートピア京都で行われた。奨学金を贈る立場と選んだ委員、受け取る学生のいずれも形式の枠を超えて心を込めたスピーチが続いた。善意が循環して次の世代、未来へバトンを受け継いでいくという願いや理念が、色濃くにじんだ。（秋元太一）



謝辞を述べた野田巧翔さん（18日、京都市中京区）



謝辞を述べた松﨑怜愛さん（18日、京都市中京区）

冒頭のあいさつで京都新聞社会福祉事業団の白石真古人常務理事は、奨学金がさまざまな人たちに支えられていることを寄付者からのメッセージ文を読み上げた後、ひと呼吸をおいた。「大変うれしいできごとがありました」と、ある奨学生から受け取った便りについて時間を割いて語った。

美術大で日本画を学び大学院に進んだ女性が初めて個展を開くことを伝える内容だったという。個展を訪ねた白石常務理事は、女性から「支える側にまわりたい」と告げられる。同事業団のチャリティー美術作品展に、女性は作品を寄贈した。「支援を受けて成長された方が、支援する側として参加してくださる。善意が次の世代へと受け継がれていく象徴だと感じています」。白石常務理事の口ぶりは感慨深げだった。

選考委員長からの祝辞で、横江美佐子・京都市南青少年活動センター所長は、世界の平和が揺らぎ国内で物価高騰が続く厳しい経済状況下でこそ「声を上げ、思いを伝える」ことの大切さに言及した。「つらい時に助けを求めることは負けることではありません。新たなつながりのチャンスです。一人ひとりを大切にする社会につながります」と呼びかけた。

２回に分けての贈呈式で、奨学生代表はそれぞれ1人ずつ謝辞を述べた。

まず1部では、過疎化に伴う医療従事者不足が課題となっている京都府北部地域で生まれ育ち、京都府立医科大の看護学科で学ぶ松﨑怜愛さんが「将来は助産師として地域医療に貢献したい」と夢を語った。実家を離れて1人で暮らし学生生活を送るうえで学費、生活費、教科書など多くの費用が必要となる。奨学金は「経済的な支えだけでなく、応援して下さる方々がいることは大きな励みになります」といい、「地域医療に貢献することで、恩を社会へ還元したい」との思いを力強い口ぶりで述べた。

２部では、フィンランドへ留学した京都産業大外国語学部の野田巧翔さんが「異なる文化や考え方に触れ、自分自身の視野を広げることができました」と、日本の魅力を世界に発信する観光の仕事に携わりたいという思いが強くなったと語った。大学1年からアルバイトとして勤務してきたユニバーサル・スタジオ・ジャパンに入社が決まり、「多くの方からいただいた親切や支えの恩返しとして、日本を訪れる方々を支える立場になりたい」と話した。

◇◇

京都新聞社会福祉事業団が発足した1965年以来続いている「愛の奨学金」は26年度、京都府・滋賀県の学生331人に総額2994万円が贈られた（児童養護施設高校生への激励金含む）。

内訳は、公募による「一般の部」は、高校生82人、大学生・専門学校生90人、「交通遺児の部」は高校生5人、大学生・専門学校生5人、公立高校から推薦を受けた「定時制・通信制高校生の部」9人だった。

京滋の学生331人に総額2994万円

2

障害者





◆障害のある人のための事業

障害のある方々が社会の一員として自立し、豊かな生活を送るためには、就労支援や文化・スポーツ活動の機会を広げることが重要です。当事業団では、障害のある人の社会参加を促進し、生活の質の向上を図るため、就労支援、体験活動、スポーツ、芸術文化など多岐にわたる事業を展開しています。

◇助成事業

「京都新聞夏季キャンプ・レク活動を応援」助成（６～９月）

障害者団体や支援グループなどが実施する宿泊を伴う、夏季のレクリエーション活動を助成

◇催　　事

「京都手話フェスティバル」（２月）……５頁

手話の普及と発展を目的に、手話スピーチコンテストや手話アトラクションを実施

シンポジウム「 障害のある人の就労支援」（２月）……６頁

障害のある人の就労支援について考えるシンポジウム

「みんなで海釣り–障害のある人の体験講座」……７頁

（９月／１泊２日・宮津市 京都府立海洋高等学校 桟橋）

障害のある人の余暇活動の支援をする１泊２日の海釣り体験講座を実施

「京都新聞おでかけ公演・障害者団体」（３月で２カ所）……１１頁

障害者施設に演奏家らを派遣する出張型公演事業　障害者施設と高齢者施設で開催

◇障害者スポーツ事業

障害のある方々が参加できる多彩なスポーツ事業に取り組んでいます

全京都障害者総合スポーツ大会（６～１０月／京都府内各地）……８頁

７競技（卓球バレー・卓球・水泳・陸上競技・アーチェリー・フライングディスク・ボッチャ）を実施

天皇杯 全国車いす駅伝競走大会（３月／国立京都国際会館前ーたけびしスタジアム京都）

全国の車いすアスリートが集結する全国規模の駅伝大会

京都ゆとりスポーツの集い（１０月／京都市障害者スポーツセンター）……９頁

京都府内の精神科病院やクリニックの患者同士がバドミントン、モルック、スクエアボッチャ、卓球を通じて、交流を図る大会

パラアーティスティックスイミングフェスティバル……９頁

（１０月／京都市障害者スポーツセンター）

障害の有無に関わらず、ともにASを通じて交流し、技術の向上を目指す大会　　**など**

京都手話フェスティバル

（２０２６年３月２２日付 京都新聞朝刊）

手話 感情豊かに

中京でフェス 交流のエピソード披露

手話の普及と発展を図る「第21回京都手話フェスティバル」が21日、京都市中京区のハートピア京都で開かれた。出場者は手話を学ぶ中で感じた喜びや、周囲との交流のエピソードを表情豊かに手話で披露した。

2月8日に予定されていたが、大雪の影響で延期となっていた。府聴覚障害者協会と京都新聞社会福祉事業団が主催。一般の部には高校生以上の9組12人、子どもの部には13人が出場した。

タクシー会社勤務の井上建紀さんは、東京都の会社で働いていた時、スマホアプリを活用してろう者のタクシードライバーが活躍していたエピソードを語り、「観光の中心地である京都でも実現したい。世界から訪れるろう者の希望になる」と訴えた。

最優秀賞には、手話でコミュニケーションを取ってプレーする「デフバスケ」に挑戦した経験をスピーチした理学療法士西村知紗さん（24）＝亀岡市＝が輝いた。（伊藤恵）

スピーチの入賞者は次の皆さん。

最優秀賞 西村知紗▽優秀賞 島田侑璃奈▽京都新聞社会福祉事業団賞 中上元幸▽敢闘賞 高岡やよい



最優秀賞を受賞した西村さん（左）＝京都市中京区・ハートピア京都

シンポジウム障害のある人の就労支援

（２０２６年２月２３日付 京都新聞朝刊）

ともに生きる

書・杭迫柏樹

◆障害のある人の就労支援シンポ◆

個性を生かせる働き方 地域の中小企業で可能

互いに認め合える仲間が力に

シンポジウム「障害のある人の就労支援」が15日、京都市中京区のハートピア京都で開かれた。地域が連携して事業所の成長につながる道筋を、幅広い層の人たちが探った。就労希望者とのマッチングや柔軟な雇用面で、地域に根ざした中小企業の果たす役割が浮かび上がった。

共生社会の実現をめざして京都新聞社会福祉事業団が主催し、16回目を迎えた。2人による講演とグループ交流会に分けて行われた。

「安心して働き続けられるための環境づくり～職場定着向上への実践～」とテーマに、産業廃棄物の収集・運搬やペットボトルの再資源化などに取り組む「クリーンスペース」代表取締役の橋本味永子さんが講演した。

保育士だった橋本さんは、産業廃棄物収集運搬業の会社として設立された同社で2006年から障害者の雇用を始め、22年にはグループホームも始めた。

従業員12人のうち9人に障害があり、職場で一見とまどうような不思議な行動について「その人なりの理由やこだわりがある」と具体例を示した上で個性や特性を仕事につなげていることを説明した。同社で働く4人も発言し、プレス機でペットボトルを圧縮する作業やグループホームでの生活について喜び、やりがい、失敗体験を語った。

橋本さんは「互いに認め合える仲間の存在が、安心して働く力になる」と述べた。

続いて京都中小企業家同友会理事の芳賀久和さんは、希望者と職場の橋渡しとなっている就労支援組織「ＣｏＣｏネット」について紹介した。





上「障害のある人の就労支援」をテーマに催されたシンポジウム（京都市中京区、ハートピア京都）

下聞き手からの質問に答える橋本味永子さん（右）と芳賀久和さん

双子の息子が知的障害の自閉症という立場をまず伝えた芳賀さんは、同友会のインクルージョン委員会では「幸せに暮らせる地域づくりを実践する経営者集団」をめざしている、と述べた。

企業や福祉、医療、行政など35機関が参画するＣｏＣｏネットの役割として「地域の中で互いの顔が見えるネットワークを通して、誰もが個性を生かせる就労の輪を広げていく」と述べた。木工や印刷会社、リサイクルショップなどでの実習について、大規模な組織ではなく中小の企業ではオーダーメードに近いマッチングができることを説明した。

「地域の中小企業はがんばっています」と、芳賀さんは結んだ。

◇　◇

中小企業の経営者や就労支援関係者のほか行政、大学関係者ら講演の聞き手約80人がグループに分れた交流会は、就労継続支援事業所「あむりた」の白濱智美施設長が司会進行を務めた。オーダーメードの支援やグループホームの役割、時間や日数など異なる柔軟な働き方などについて活発に意見を交わした。

障害者雇用を始めたきっかけ、職場にとってのメリットとデメリット、今後の課題など各グループから上がった質問に対し、橋本さんと芳賀さんはそれぞれマイクを握って答えた。2人のていねいな口ぶりからは「地域が連携して就労の輪を広げよう」との共感がにじんでいた。（秋元太一）

みんなで海釣り-障害のある人の体験講座

（２０２６年９月２８日付 京都新聞朝刊）

ともに生きる

書・杭迫柏樹

◆ みんなで海釣り
—障害のある人の体験講座 ◆

「釣れた」「大きいぞ」 初秋の海を楽しむ

海洋高生らサポート

障害のある人たちの余暇として、海に親しみ釣りを楽しんでもらう「みんなで海釣り—障害のある人の体験講座」（京都新聞社会福祉事業団主催）が9月12、13の両日（1泊2日）、宮津市の京都府立海洋高校・桟橋などを会場に開かれた。好天に恵まれた桟橋では、大小の魚が次々に上がり、参加者たちは初秋の海の2日間を心ゆくまで楽しんだ。

1998年から始まった恒例行事で、ことしから京都新聞社会福祉事業団の単独事業となった。京滋から障害のある人25人と、付き添いの家族ら21人が参加。ボランティアスタッフの府立海洋高校生徒48人や釣り愛好家団体の会員なども加わり、2日間ではのべ250人余りが集まった。

初日の12日は、宮津市の府立青少年海洋センター「マリーンピア」で開講式があり、社会福祉事業団の高岡俊裕事務局長らによる開会あいさつの後、海洋高校2年の山田悠世さんら生徒17人が「海の生き物の不思議」と題して講演。マアジとクロダイ、クラゲの3種について、生態やその魅力をクイズ形式で紹介した。

夕食後は本番に備え、インストラクターを務める釣り愛好家団体のメンバーたちが竿の扱いや、救命胴衣のつけ方などをコーチ。全員で「おさかな天国」の曲に合わせたダンスを踊り、交流を深めた。

翌13日は「雨の予報」が一転、絶好の釣り日和になった。午前8時半、桟橋に並んだ参加者たちが一斉に竿を入れると、とたんに引きがあり魚とのかけ引きが始まった。

「釣れた」「大きいぞ」。あちこちで声が響き、トロ箱を閉じる間がない人も。小アジや小ダイに、グレ、ガシラ、カワハギなど獲物は豊富で、参加者たちは釣れるたびにスマホカメラにポーズを取っていた。

京都市上京区から息子の幸佐さん（18）と共に参加した杉野義幸さん（55）は、「お土産にして家族みんなで食べられるほど釣りたい」と、竿先に神経を集中した。伏見区から来た畑田弘呂志さん（66）は、過去20回以上参加のベテラン。「釣りはもちろん、若い人と交流できるのが一番の楽しみ」と表情を崩した。

桟橋上では、海洋高生たちが、マンツーマンで参加者を介助。釣り具の準備やごみ収集も担い、女子生徒は冷たい飲み物を配るサービスに汗を流した。京都府磯釣連合会などインストラクター役のメンバーも、餌や針の交換からタモの用意まで細かい補助作業を受け持った。

約3時間で納竿（のうかん）すると獲物の最大長と総重量の計量が行われ、表彰式に移った。長寸の部1位は30㌢のキジハタ、重量の部1位は11・2㌔だった。入賞者には、それぞれ釣り具メーカー協賛の楯や賞品が贈られ、会場は拍手と笑顔に包まれた。

今回、とくに府立海洋高校と生徒さんに対して、社会福祉事業団から長年の協力に感謝するクリスタル楯を贈ることになり、表彰式で上林秋男校長と生徒代表に手渡された。

後援・協力・協賛団体は次の通り。【後援】京都府、宮津市、宮津市社協、KBS京都【特別協力】京都府立海洋高校【協力】日本釣振興会近畿地区支部・京都府支部、全日本釣り団体協議会、京都府磯釣連合会、MFG、GFG、京都府漁業協同組合【協賛】アサヒフーズ、がまかつ、東レ・モノフィラメント、ハヤブサ、マルキュー、マルゴ、レーヴ



開始とともに一斉に竿を入れる参加者たち（宮津市の京都府立海洋高校・桟橋）



「釣れたよ」Vポーズがあちこちで

全京都障害者総合スポーツ大会

（２０２６年７月１４日付 京都新聞朝刊）

事業団だより

全京都障害者スポーツ大会開幕

卓球バレー、白熱ラリー

第46回全京都障害者総合スポーツ大会の総合開会式が６月21日、京都市北区の島津アリーナ京都で行われ、卓球バレー大会で開幕した＝写真。

大会は、障害のある人たちがスポーツを通じて健康と体力の維持増進を図ることを目的に、京都障害者スポーツ振興会、京都府、京都市、京都新聞社会福祉事業団など９団体が主催している。同大会は、10月11日の陸上大会まで、卓球、ボッチャ、水泳、アーチェリー、フライングディスクの計７競技が府内各地で順次開催される。

総合開会式では、西陣工房Ｂチームの堀田優大さんが「最後の一球まで全力プレーする」と力強い選手宣誓を行った。



卓球バレー大会には、一般、学校、施設の３部門を合わせて31チームから約250人が参加し、１チーム６人がコートを挟んで音の鳴るボールを転がし合う白熱したラリーが展開されていた。

各部の優勝は次の通り。

一般の部＝西陣工房Ａ（北区）、学校の部＝地域協働東山（東山区）、施設の部＝西陣工房Ｃ（北区）





京都ゆとりスポーツの集い

（２０２６年１０月１９日付 京都新聞朝刊）

事業団だより

3種、好プレーに歓声

京都ゆとりスポーツの集い

心の病を抱えている人たちがスポーツを通じて交流する「京都ゆとりスポーツの集い」が９日、京都市左京区の市障害者スポーツセンターで行われ、約90人が参加した＝写真。

精神科の病院やデイケアに通院、通所している人の健康増進や社会参加促進を願い、府内の精神科病院やクリニックでつくる実行委員会と京都新聞社会福祉事業団が共催し、今回で46回目。

当日は卓球、モルック、スクエアボッチャの３種目の競技を行った。各競技では、好プレーに歓声や拍手が沸き上がっていた。

今回は５施設が参加し、選手たちは試合を通して交流を深めた。

実行委員会事務局を務めた京都民



医連あすかい病院の福田寛さんは「昨年からソフトボールから競技内容を変えて開催しました。来年も参加者のニーズに応じた競技内容を検討していきたい。患者さん同士が交流する機会となっているので、これからも継続して開催していきたい」と話していた。

パラアーティスティックスイミング フェスティバル

（２０２６年１０月１２日付 京都新聞朝刊）

事業団だより

水中で音楽と体を同調

パラASフェスに114人

左京

障害の有無や年齢、性別にとらわれることなく水中で音楽と同調し演技する「第34回パラアーティスティックスイミングフェスティバル」が４日、京都市左京区の市障害者スポーツセンターで行われ、114人が参加した＝写真。日本パラアーティスティックスイミング協会などが主催し、選手同士の交流や技術向上、普及を目的に開いている。

京都をはじめ東京や石川など８都府県から13チームが出場し、ソロやデュエット、チームなどに分かれ26演技を行った。

チームの演技では障害のある人とない人が音楽に合わせて、水面に花のような輪や列になって隊形を組



み、笑顔でポーズが決まると観覧席から歓声と拍手が湧きおこった。

印象深い３演技に贈られるナイスパフォーマンス賞には、ソロの部で佐々木知亜紀さん（神奈川県）、チームⅠの部でル☆アマーミ（兵庫県）、フリーコンビネーションの部で京都コスモス（京都府）が選ばれた。

3

高齢者





◆高齢者のための事業

少子高齢化が進む中、高齢者が安心して暮らせる社会の実現に向けた支援が求められています。当事業団では、高齢者の生活を支えるため、外出機会の創出、介護用車椅子の贈呈、在宅福祉支援など、さまざまな事業を行っています。

◇助成事業

在宅高齢者福祉サービス支援「ホームヘルプサービス活動に関する備品助成」.... １０頁
（１２月）
在宅高齢者へのホームヘルプサービスを行う非営利団体に対し、福祉・介護用品の購入費を助成

「高齢者へのプレゼント」贈呈（２月）..... １１頁
特別養護老人ホームへ介助用車いすを贈呈

◇催　　事

「京都新聞おでかけ公演・高齢者団体」（３月で２カ所）.....１１頁
高齢者施設に演奏家らを派遣する出張型公演事業　高齢者施設と障害者施設で開催

ホームヘルプサービス活動に関する備品助成
（２０２６年１月１９日付　京都新聞朝刊）

在宅介護の質向上へ
19団体に助成金贈呈

京都新聞社会福祉事業団はこのほど、高齢者の在宅福祉サービスを行う非営利の団体や事業所を対象にした「ホームヘルプサービス活動に関する備品助成」で19団体（京都市１、京都府14、滋賀県４）に総額137万7503円を贈呈した。

同事業は、在宅高齢者への福祉サービスの充実を目的に、介護用品や福祉用具などの購入費を10万円を上限に助成している。助成金は、移乗シートや非接触型体温計、血圧計、使い捨て手袋などに充てられる。

助成先は次のとおり。

ＨＯＰＥ300宇治憩の家事業所（京都市伏見区）、福知山市社会福祉協議会訪問介護事業所（福知山市）、綾部市社会福祉協議会訪問介護事業所（綾部市）、亀岡市社会福祉協議会ホームヘルプセンター（亀岡市）、長岡京市社会福祉協議会きりしま苑（長岡京市）、藹々、京丹後市社会福祉協議会久美浜支所（以上、京丹後市）、南丹市社会福祉協議会ほほえみ八木訪問介護事業所、南丹市社会福祉協議会ほほえみかぐら訪問介護事業所（以上、南丹市）、木津川市社会福祉協議会ケアセンターハッピーコスモス（木津川市）、大山崎町社会福祉協議会（京都府大山崎町）、京丹波町社会福祉協議会ヘルパーセンターほほえみ（京丹波町）、北星会与謝の園訪問介護事業所、与謝野町社会福祉協議会介護事業所、丹後福祉応援団訪問介護事業所（以上、与謝野町）、近江八幡市社会福祉協議会ヘルパーステーションあづち（近江八幡市）、栗東市社会福祉協議会訪問介護事業所（栗東市）、甲賀市社会福祉協議会ヘルパーステーションこうか（甲賀市）、日野町社会福祉協議会ホームヘルパーステーションひだまり（滋賀県日野町）

事業団だより

高齢者へプレゼント

（２０２６年３月９日付　京都新聞朝刊）

事業団だより

高齢者へのプレゼント事業
介助用車いすを贈呈

京都新聞社会福祉事業団は、「高齢者へのプレゼント事業」として京都府、滋賀県内の特別養護老人ホーム７施設に介助用車いすを各１台贈呈した＝**写真**。2008年度から毎年実施し、贈呈数は306台となった。

企業や団体からの本紙「記念日おめでとうコーナー」や高齢者事業協賛寄付金などを原資にしている。

車いすは、背もたれと座面角度が調整できるティルト・リクライニング介助型と、ひじ置きと脚部が動かせる多機能介助型の２種類から選択。

前者を選択したこぶしの里サテライト今宮（京都市北区）では、試乗した佐原隆さん（89）が「新しい車いすの乗り心地は最高」と感想を述べ、施設長の服部裕美さん（47）は「気持ちが前向きになれて、趣味の短歌や俳句に励まれています」と話した。



他の贈呈先は次の通り。

洛西（西京区）、京都指月あさがおの郷（伏見区）、京都八勝館（八幡市）、真野しょうぶ苑（大津市）、第二邂逅の郷（彦根市）、治田の里（栗東市）

京都新聞おでかけ公演

（2026年3月6日付　京都新聞朝刊）

利用者を楽しませたバイオリンとファゴットの奏者２人による演奏会（守山市十二里町、もりやま作業所）



京都フィルのメンバー２人

作業所で演奏妙技

守　山

京都フィルハーモニー室内合奏団のメンバー２人による「おでかけ公演」が、守山市十二里町のもりやま作業所で行われた。バイオリンとファゴットの息の合った生演奏によるクラシックや歌謡曲を利用者ら約40人が鑑賞し、拍手を送った。

京都新聞社会福祉事業団主催の「京都新聞おでかけ公演　京フィル・デュオ演奏会」で、外出がしにくい高齢者や障害者の施設を訪ねて演奏会をプレゼントしている。

この日はバイオリンの森本真裕美さんとファゴットの田中裕美子さんが出演した。モーツァルトの「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」やバッハの「G線上のアリア」をはじめ、唱歌や歌謡曲のメドレーを披露した。

楽器の紹介もあり、参加者はじっくりと聴き入ったり、手拍子を合わせたりして、楽しいひとときを過ごした。（日下田貴政）

4

子ども





◆子どもたちのための事業

子どもたちの健全な成長と明るい未来を支えるため、当事業団では多彩な活動を展開しています。児童養護施設へのレクリエーション支援や卒業お祝い金の贈呈、交通遺児への支援、親子で楽しめる子どもシアターの開催など、子どもたち一人ひとりの笑顔と希望を育む取り組みを行っています。これらの活動を通じて、子どもたちが安心して学び、遊び、成長できる環境づくりに努めています。

◇助成事業

「児童養護施設の子どもたちのレクリエーション」助成（９月～翌年３月）……１２頁

京都・滋賀の全児童養護施設に対し、レクリエーション活動を助成

「児童養護施設の子どもたちへの卒業お祝い金」贈呈（３月）……１３頁

中学・高校の卒業とともに京滋の児童養護施設を巣立つ子どもたちに「卒業祝い金」を贈呈

「交通遺児の子どもたちへの卒業お祝い金」贈呈（３月）……１３頁

交通遺児で小学校・中学・高校を卒業する子どもたちに「卒業祝い」として図書カードを贈呈

◇催　　事

「京都新聞お楽しみ子どもシアター in 京都／in 滋賀」（８月）……１３頁

京都・滋賀で人形劇などの公演を開催し、子どもたちを招待

児童養護施設レクリエーション（２０２６年４月２０日付　京都新聞朝刊）

児童養護施設レク助成

子どもたちが笑顔に

事業団だより

「かいゆうかんにいきました。かんらん車にのりました。こわかったけど楽しかった」

2025年度「児童養護施設レクリエーション」に参加した子どもたちから感謝の気持ちのこもった寄せ書きが届いた＝**写真**。

同事業は、京都新聞社会福祉事業団が京都、滋賀の全17児童養護施設で暮らす子どもを対象に１人2700円と引率費用１施設２万円を助成し、25年度は570人の子どもたちが参加した。

舞鶴学園（舞鶴市）でともに暮らす小中高生らが、１泊２日で大阪に訪れ、水族館や大観覧車、温泉などを楽しんだという。引率した職員は「大阪では『山がない』『ビルがい



っぱい』と目をきらきらさせる子どもたちの笑顔を見ることができ、思い出に残る楽しい旅行ができました」と語った。

助成は、京都ゴルフ倶楽部（京都市北区）と同事業団の共催で開催した児童養護施設の子どもたちのための「チャリティーゴルフ大会」での参加者や企業からの善意を主に、個人からの寄付金を活用している。

児童養護施設の子どもたちへの卒業お祝い金
交通遺児の子どもたちへの卒業お祝い金
（２０２６年３月１７日付 京都新聞朝刊）

事業団だより

卒業おめでとう　施設巣立つ52人に祝い金

卒業シーズンを迎え、京都新聞社会福祉事業団は、京都府、滋賀県内の16の児童養護施設を巣立つ中学生２人、高校生50人に「卒業お祝い金」として総額204万円を贈った。

お祝い金は「児童養護施設の子どもたちのために」と寄せられた善意をもとに、中学生に１人２万円、高校生に同４万円を贈呈している。高校生５人が卒業する京都市東山区の平安養育院（水野



正美施設長）では、同事業団の白石真古人常務理事が「大切に役立ててください」と代表生徒に手渡した＝写真。

卒業生は「好きな英語を生かし、客室乗務員（CA）を目指している。大学では留学も考えており、そのためバイトも頑張ります」と夢を語った。

また、小中高校を卒業する京都、滋賀の交通遺児に「卒業お祝い」として、図書カードを小学生５人（１人５千円分）、中学生８人（同７千円分）、高校生８人（同１万円分）の計21人に京都府や京都市、おりづる会（滋賀県）を通じて贈った。交通遺児のために寄せられた寄付を活用している。

京都新聞お楽しみ子どもシアター in 京都
（２０２６年９月２１日付 京都新聞朝刊）

子どもたち 人形劇の世界へ
北区でお楽しみシアター



ヒキガエルとミミズクを演じる人形劇団京芸の団員（京都市北区・市北文化会館）

京都と滋賀の子どもたちを招待する「京都新聞お楽しみ子どもシアターin京都」が20日、京都市北区の市北文化会館であった。親子連れら約350人がプロの劇団員による心温まる人形劇を鑑賞し、時折歓声を上げながら物語の世界に入り込んだ。

京都新聞社会福祉事業団が子どもたちの健やかな成長を願って主催する恒例イベントで、児童養護施設の子どもたちも招き紙芝居や劇を上演している。今回は近畿を中心に全国で活動する「人形劇団京芸」（宇治市）の団員3人が出演し、児童文学を基にした作品「火ようび日のごちそうはひきがえる」を披露した。

物語では、ヒキガエルのウォートンがミミズクに捕まってしまい、5日後に食べられてしまうことを告げられながら会話を通じて心を通わせていく。劇終盤では、ウォートンと仲間たちがキツネに襲われたミミズクを助けにいく迫力あるシーンに、子どもたちは歓声を上げていた。

長岡京市の小学1年北村麟子さん（6）は「ウォートンの仲間のネズミたちがいっぱい出てきて面白かった」と満足した様子だった。（青山智耶）

5

子育て





◆子育て応援事業

子どもたちの健やかな成長と、子育て中の保護者を支えるため、当事業団では二つの助成事業を実施しています。

◇助成事業

「子育て仲間を応援」助成（７月）……１５頁

子育て中の保護者が交流し支え合うサークルや支援グループを対象に、１団体２万円を助成。２０２５年度は７４団体に総額１４８万円を贈呈しました。２００５年度に開始して以来、情報交換や交流の場を支援しており、少人数グループにも助成する独自の制度として好評を得ています。

「子育て事業助成」助成（７月）……１５頁

京都・滋賀で子育て支援を行う非営利団体を対象に、講演会や学習会、イベントなどの事業に対し、１団体あたり１５万円を上限に助成。２０２５年度は２３団体から応募があり、子ども向けキャンプや文化体験事業、親子で楽しむミュージカル、お話会や音楽会、映画上映会、人形劇など、計１３事業に８３万８０００円を助成しました。



子育て仲間を応援助成・子育て事業助成

（２０２６年５月１２日付 京都新聞朝刊）

ともに生きる

書・杭迫柏樹

◆ 子育て応援事業 ◆

救命救急本気で楽しく
生の音楽を乳幼児に…

京都新聞社会福祉事業団は、京都府、滋賀県で工夫を凝らして子育て活動に取り組む団体に助成する「子育て仲間を応援」と、催しや行事などを支援する「子育て事業助成」を毎年行っている。2025年度はこんな活動を支援した。

「事業助成」を受けた木津川市のグループ「子育てママのつながるBOSAI」は昨年8月、同市の「いずみホール」で、「本気の救命救急ワークショップ」と題したユニークな取り組みを行った。

「もしもの時に迷わず動ける知識を親子で楽しく学ぼう」というのが目的で、市内の小学生の親子50人以上が参加した。

当日は事前に募集した小学生から高校生までのボランティア11人も協力。元消防士の講師にAEDの使い方を経験を踏まえて伝えてもらったり、実際に近い形で人形を使った胸部を圧迫する心肺蘇生なども体験した。毛布で応急の担架を作って力を合わせて人を運ぶ体験や、視界不良な暗闇での避難誘導体験などもあり、その場で出会った人とも臨機応変にとっさに協力できるよう取り組んだ。団体代表で防災士の川﨑あきさん(49)は「救命に関する体験イベントは少ないので、説明だけよりも、とにかく楽しく体験してもらうことが大事。今後も続けていきたい」と考えている。



毛布で応急の担架を作り力を合わせて人を運ぶ体験なども行った（昨年８月、木津川市）＝提供写真

同じく「事業助成」を受けた草津市の「子育て支援グループ はな・はな」は昨年9月に「20周年記念ありがとう おやこコンサート～おとのかけはしさんといっしょ～」を草津アミカホールで開いた。滋賀県出身の音楽家グループ「おとのかけはし」がボーカル、ピアノ、パーカッションなどの演奏を披露。乳幼児から小学生の親子ら180人ほどが訪れ、本格的な演奏と歌を楽しんだ。

代表の白井けい子さん（77）は「幼いころから生の音楽に親しむのは子どもの感性を豊かにするために大事だと思う。クラシックを中心とした音楽会は乳幼児はほとんど入場できない。今回は助成金を得て、子どもは無料、大人は格安の料金で赤ちゃんから参加できるコンサートを開催でき、生の音楽に触れてもらい、好評だった」と話している。

京都市南区の「空き家バンク京都子ども食堂」は7月に下京区の梅小路公園で、子どもも参加するファッションショーなどの「3周年感謝祭」を開催。大津市の「逢坂Ｓｍｉｌｅ ｄｏｏｒ 子ども食堂」は12月に逢坂公民館で、コンサートを交えた「クリスマス会」を開き、いずれも実施費用の一部に「事業助成」を充てた。

大津市で親子で稲作体験や自然観察活動を行った「木戸小学校おやじの会」や、京都市西京区で手作り給食の「子ども食堂」や公園などで遊びやゲームを楽しむ活動を続けている団体「オープンスペース祐の風」などには「仲間を応援」助成を行った。

25年度は「仲間を応援」（一律2万円）で74団体（京都市内15、府内30、滋賀県内29）に総額148万円を、「事業助成」（上限15万円）で計13事業（市内4、府内4、県内5）に総額83万8000円を助成した。26年度分の申請は29日まで受け付けている。

充実した活動を支援 今年度分の申請は29日まで

6

福祉活動
支援





◆福祉活動支援事業

地域福祉の充実を図るため、当事業団では多様な福祉活動を支援しています。

「京都新聞福祉活動支援」助成（２～３月）.....１７頁

京都・滋賀の福祉施設や団体を対象に、「運営支援」と「設備支援」の２部門で助成を行い、地域福祉の向上を目指します。支援対象は、障害のある人、高齢者、子ども、難病患者、生活困窮者の支援に取り組む団体など幅広く、１団体あたり３０万円を上限に助成します。選考委員会では、地域福祉への貢献度、事業の推進力、期待される成果などを基準に審査し、助成先を決定します。

２０２５年度は、京都の企業から「高齢者のために役立ててほしい」と３００万円の寄付を受け、高齢者支援団体や当事者団体３団体に各１００万円を贈呈する特別枠を設けました。これにより、当初の助成額４００万円と合わせ、総額７００万円の助成を実施しました。

（※２０２５年度から、助成予算総額を４００万円に、１団体あたりの上限助成額を３０万円にしています）

京都新聞福祉活動支援　選考委員会
（２０２６年２月２０日付 京都新聞朝刊）

京都新聞福祉活動支援 選考委

助成対象28団体内定

「特別枠」の３団体も



助成先を審議する選考委員たち
（京都市中京区・京都新聞社）

京都府と滋賀県のボランティア団体や福祉施設などに助成する「京都新聞福祉活動支援」の選考委員会が19日、京都市中京区の京都新聞社であり、計700万円を助成する28団体を内定した。

京都新聞社会福祉事業団が前身の事業を含め197９年度から続けている。京都新聞チャリティー美術作品展の収益や同事業団への寄付を元に、「運営」と「設備」の2部門で計４００万円を助成する。

1団体当たりの助成額は最大30万円。さらに本年度はマンション事業を営む企業から大口の寄付があったため、高齢者の支援団体や当事者団体を対象とした「特別枠」を設け、３団体に１００万円ずつ助成する。

申請は運営22、設備14、特別枠3の計39団体からあった。選考委員会では助成を希望する理由や助成金の使い道などを慎重に議論した。3月16日に同事業団理事会で助成先を正式決定し、3月下旬に贈る。（田代真也）

選考委員は次の皆さん。京都市社会福祉協議会事務局長荒川林太郎、日本画家猪熊佳子、京都府社会福祉協議会事務局次長神戸望、京都商工会議所女性会副会長鈴木美智子、滋賀県社会福祉協議会事務局次長高橋宏和

京都新聞福祉活動支援助成

（２０２６年４月６日付 京都新聞朝刊）

ともに生きる　京都新聞社会福祉事業団だより

地域福祉活動に役立てて　助成金贈る

京滋28団体に700万円



京都新聞福祉事業団は、京都、滋賀両府県の福祉施設やボランティアグループなどの活動を支援する２０２５年度「京都新聞福祉活動支援」事業の贈呈式をこのほど、京都市中京区のハートピア京都で行った＝写真。

1団体当たり上限30万円までを助成する運営、設備両部門と高齢者の支援団体や当事者団体を対象に１００万円を3団体に助成する特別枠で申請を受け付けた。運営13団体（申請22団体）に計１８２万円、設備12団体（同14団体）に計２１８万円、特別枠3団体（同3団体）に計３００万円、計28団体に総額７００円を助成。高齢者や難病患者、子どものための支援団体や障害のある人のために活動するボランティアグループの活動費、子ども食堂や障害者施設の設備品の購入などに支援した。

助成団体は、次の通り。

【特別枠】

京都ケアラーネット（京都市北区）、認知症の人と家族の会（上京区）、ハンド&ネイルケアボランティアチームガンチー（左京区）

【運営部門】

自閉症ｅサービス@京都・滋賀（京都市上京区）、つるかめ笑顔クラブ（同）、京都府網膜色素変性症協会（中京区）、お客様がいらっしゃいました・（下京区）、京都障害福祉デジタル化推進協会（左京区）、助けあいグループりぼん（東山区）、京都ＹＭＣＡ長岡こおろぎ（西京区）、ジョイント西京視覚障害者ボランティア（同）、京よりそい（宇治市）、『くらしの応援隊』ボランティアの会（長岡京市）、おうさか高齢者フレイルケアの会（大津市）、異才ネットワーク（同）、元気っずミーオ放課後等デイサービスげんき（草津市）

【設備部門】

西陣工房（京都市北区）、障碍者芸術推進研究機構（同）、京都犯罪被害者支援センター（上京区）、チャイルドライン京都（山科区）、洛西寮朗読ボランティアサークル（西京区）、ありがとう（伏見区）、あまつこども食堂（同）、チェリー工房（城陽市）、向日市点訳サークル「きつつき」（向日市）、バスハウス（長岡京市）、滋賀県母子福祉のぞみ会（大津市）、あじっこ（米原市）

7

顕彰



◆京都新聞福祉賞・福祉奨励賞

（贈呈式１月）……１８～１９頁

京都府および滋賀県において、地域福祉の向上に著しい功績のあった個人または団体を対象に「京都新聞福祉賞」を、また、活動歴１０年未満の若い団体等で、今後の活躍が期待される個人または団体を対象に「京都新聞福祉奨励賞」を贈り、顕彰しています。

本事業は、１９６５年の事業団設立と同時に「京都新聞社会福祉功労者表彰」として開始し、今年で６１年目を迎えます。２０２４年度に迎えた設立６０周年を機に、京都新聞との連名主催とし、京都新聞グループ全体で支える体制へと発展させ、実施しております。

贈呈額は、福祉賞が個人２０万円、団体３０万円、奨励賞は個人・団体ともに１０万円です。推薦は新聞紙面等を通じて公募し、選考委員会において決定します。これまでに個人１９２件、団体７８件、計２７０件（２０２５年度時点）を表彰してきました。

２０２５年度は、福祉賞２団体・福祉奨励賞２団体に贈呈をしました。



京都新聞福祉賞・京都新聞福祉奨励賞 贈呈式

（２０２６年１月２７日付 京都新聞朝刊）

「新たなつながりで前を」

京都新聞福祉・奨励賞贈呈式

社会福祉の向上に貢献した団体や個人を表彰する「京都新聞福祉賞」と、将来のリーダーとして期待される若い世代に贈る「京都新聞福祉奨励賞」の贈呈式が26日、京都市中京区のハートピア京都であった。福祉賞2団体、奨励賞2団体の功績をたたえた。

京都新聞と京都新聞社会福祉事業団が毎年実施し、61年目。

今年の福祉賞は、心臓病の子を持つ親が交流する「全国心臓病の子どもを守る会京都支部」（上京区）と、摂食障害を抱える人の自助グループ「あかりプロジェクト関西」（舞鶴市）が選ばれた。

福祉奨励賞は、京都大生らで続ける「こども食堂「からふる」（左京区）、働く大人を小学生が取材し「子ども新聞」を発行する「ｉｎｏｔｅ＋Ｐ」（伏見区）に贈られた。

式では、同事業団理事長の大西祐資・京都新聞社長が「当事者に寄り添い、安心と希望を与えた」とたたえ、賞状を手渡した。

受賞スピーチで、全国心臓病の子どもを守る会の石神彩乃支部長（51）は「リアルな人間関係を敬遠する風潮で、つながりを求めても一歩を踏み出せない人がいる。心強く温かな場所があると知って新たにつながり、前を向く人が増えていくと信じている」と述べた。（田中恒輝）



京都新聞福祉賞の表彰を受ける全国心臓病の子どもを守る会京都支部の石神支部長（左）＝京都市中京区・ハートピア京都　撮影・三木千絵

ともに生きる
[TOMONI-IKIRU]

公益財団法人 京都新聞社会福祉事業団

京都市中京区烏丸通二条上ル蒔絵屋町260
京都新聞トラストビル 4階
TEL 075（241）6186 ／FAX 075（222）2515

ホームページ
が新しくなりました

X公式アカウント

電子決済による
寄付受付をはじめました